

HanjaTimes

ハンジャタイムズ

7

令和8年

2026

July

現場と管理どちらかが我慢する時代はおわりです
災害に強いIT環境の作り方
世界がAIの「ルールづくり」に本格着手
ボーっとしてるなら解いてみて

株式会社ハンジャ・ネットワークス

〒901-2301 沖縄県中頭郡北中城村島袋 480 番地

TEL 050-5810-5929 / FAX 098-989-7715

現場 管理



どちらかが我慢する
時代は終わります。

本当の業務改善とは？

皆さんの会社では、このようなことはありませんか？
紙の申請書を書いている
Excel をメールで送り合っている
承認待ちで仕事が止まる
現場から「また書類ですか…」と言われる
管理側は「ちゃんと報告して！」とお願いする
どちらも悪くありません。
現場は忙しい。
管理側も会社を守るために必要な情報が欲しい。
だからこそ、
「現場」と「管理」のどちらかに無理をさせるのではなく、
両方が楽になる。
これが本当の業務改善なのです。

管理はもっと **楽** にできる

管理の方は、
「あの申請どうなった？」「誰が持ってる？」「最新版どれ？」
「Excel 送って」
そんな確認作業が毎日のようにあります。
本当に大変なのは、管理ではなく、
探す・確認する・催促する ことです。

例えば確認作業

営業担当が外出先からスマートフォンで申請

転記作業不要

上司へ通知

その場で承認

担当部署へ自動通知

データはそのまま台帳へ登録

できたら？

データはそのまま台帳へ自動登録。
人による転記や二重入力が必要になることで、
「書く」「探す」「確認する」「入力する」
といった日々の手間を大幅に減らすことができます。
さらに、情報が一か所に集まることで、検索や進捗確認も
簡単になり、確認作業そのものを減らすことができます。

現場はもっと **楽** にできる

現場の方は、
「また報告書か…」
と思うことも多いでしょう。
しかし、本当に面倒なのは、報告ではなく
同じ内容を何回も書くこと です。

例えば工事報告の場合

現場で紙に記入

スマホで完結

会社へ戻って Excel 入力

写真整理

報告書作成

お客様へ提出

できたら？

こんな流れになっていませんか？
これをスマホで一度入力するだけで、
写真も添付され、報告書も完成し、管理台帳にも登録される。
そんな仕組みが実現できます。
現場の負担はむしろ減るのです。

● コラボフローをご存じですか？

コラボフローとは、紙や Excel で行っている申請・承認業務を電子化できるワークフローシステムです。

稟議書や休暇申請、経費精算、各種申請書などを Web 上で作成・承認できるため、押印や書類の持ち回りが不要になります。申請状況もリアルタイムで確認でき、業務のスピードアップやペーパーレス化を実現します。

● 実は、このような仕組みは「kintone」でも構築可能です。

当社では、お客様の業務内容に合わせて、ワークフローだけでなく、その後のデータ管理や集計・分析まで含めたシステムを kintone でご提案しています。

申請書 承認 履歴管理 通知 データベース 検索 集計 ダッシュボード など

お客様の業務に合わせてオーダーメイドで作ることができます。

さらに、私たちがご提案するのは、**単なるシステム導入ではありません。**

会社ごとに異なる申請方法や承認ルート、管理方法など、「この会社ならではの」業務に合わせて、一つひとつオーダーメイドで構築します。そのため、無理に既製品のルールへ業務を合わせる必要はありません。

業務に合わせてシステムを作ることで、現場も管理者も無理なく使い続けられる仕組みを実現できます。

● 小さく始めることが、業務改善成功の第一歩

「業務改善」と聞くと、大規模なシステム導入をイメージされる方も多いかもしれません。

しかし、実際には一度にすべてを変える必要はありません。

まずは、たった一つの業務から始めるだけでも十分です。

例えば、

休暇申請

工事報告書

見積承認

設備点検

日報管理

このような日常業務をデジタル化するだけで、紙のやり取りや転記作業、確認の手間が減り、年間では何十時間、場合によっては何百時間もの業務時間削減につながることもあります。業務改善は、決して大きなシステムを導入することが目的ではありません。現場で困っていることを一つずつ改善し、その積み重ねが会社全体の生産性向上につながります。「まずは一つだけやってみる。」その小さな一歩が、大きな変化へのきっかけになるかもしれません。

最近、「DX」という言葉をよく耳にします。しかし、DX とは、紙をなくしたり、高価なシステムを導入したりすることではありません。

例えば、現場では時間との勝負になる場面も多く、**紙に書く方が早く、確実なケースもあります。**

大切なのは、**現場の作業を無理に変えるのではなく、紙で記入した内容を会社で簡単に取り込み、集計や管理、情報共有までスムーズにつなげる仕組み**をつくることです。

つまり、DX の目的は単に「デジタル化」をすることではなく、デジタル技術を活用し今までの仕事のやり方をより良く変革していくことにあります。

現場と管理の両方が働きやすくなること。業務に合わせて最適な方法を選ぶことこそ、本当の業務改善だと私たちは考えています。

私たちがお手伝いします

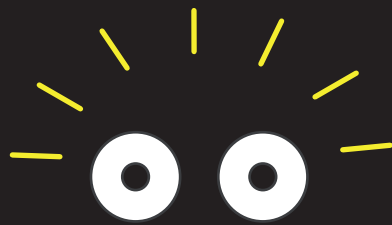
ハンジャ・ネットワークスでは、お客様の業務と一緒に見直し、「現場も管理側もラクになる仕組み」をご提案しています。「こんなことできるかな？」というご相談からでも大歓迎です。お気軽にご連絡ください。

TEL : 050-5810-5929

紙や Excel で管理している業務や、「もっと効率化できないかな」と感じている業務がありましたら、ぜひお気軽にご相談ください。

業務に合わせた仕組みづくりで、皆さまの業務改善をサポートいたします。

人が頑張る会社 から 仕組みで回る会社へ



もし会社が停電したら？

災害に強い IT 環境の作り方

沖縄では毎年のように台風が接近し、停電や通信障害が発生しています。

「数時間の停電だから大丈夫。」「復旧すれば仕事を再開できる。」そう思われるかもしれませんが、本当に怖いのは停電そのものではありません。**停電後に会社の業務が元どおり動かないこと**なのです。

パソコンが起動しない。サーバーが故障した。ネットが使えない。電話が繋がらない。このような状況になると、業務が止まるだけでなく、お客様からの信用にも影響を及ぼします。

今回は、災害に強い IT 環境を作るために知っておきたいポイントをご紹介します。

あなたの会社には、いくつありますか？

会社には、日々の業務を支えるさまざまな IT 機器があります。
次の中で、あなたの会社にあるものをチェックしてみてください。

- ☐ パソコン
- ☐ サーバー
- ☐ NAS（ファイルサーバー）
- ☐ Wi-Fi 機器（アクセスポイント・ルーター）
- ☐ インターネット回線
- ☐ ビジネスフォン
- ☐ 防犯カメラ
- ☐ クラウドサービス（Microsoft 365、Google Workspace など）

いくつ当てはまりましたか？

実は、これらはすべて同じように見えても、**停電や災害が発生した際の影響はそれぞれ異なります。**

例えば、クラウドサービスはデータセンターで運用されているため、会社が停電してもデータそのものは安全に保管されています。

一方、社内に設置しているサーバーや NAS は、停電や落雷などの影響を直接受ける可能性があります。

つまり、「会社の中にあるもの」と「社外（クラウド）で運用されているもの」では、災害への強さが大きく異なるのです。

「バックアップしているから安心」は本当？

「毎日バックアップを取っているので大丈夫です。」

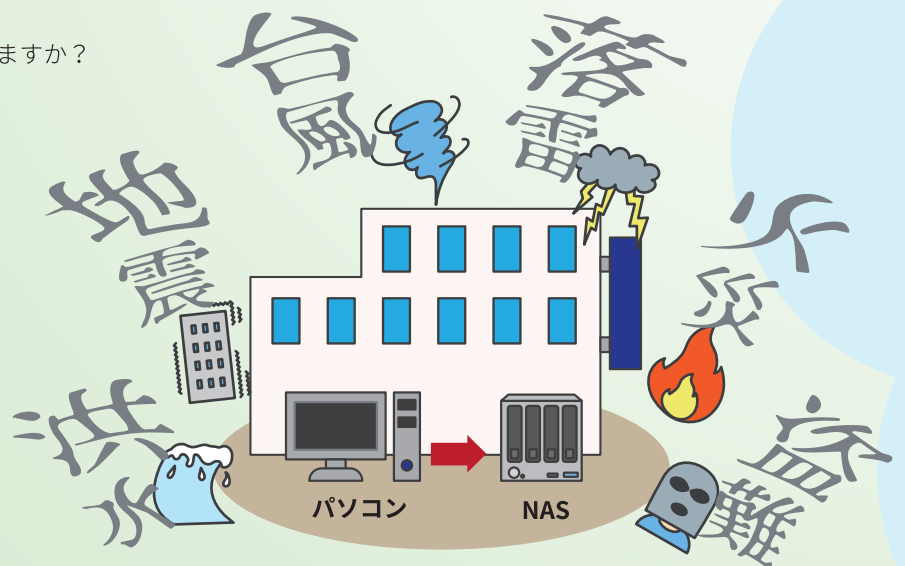
という声をよく聞きます。

もちろん、バックアップはとても重要です。

しかし、そのバックアップはどこに保存されていますか？

もちろんバックアップは重要ですが、その保存場所が「社内のパソコンから同じオフィスにある NAS（ネットワーク HDD）」だった場合、大きなリスクが隠れています。万が一、火災や水害、落雷、台風による浸水などが発生すると、パソコンとバックアップが同時に失われてしまう可能性があるからです。

つまり、「バックアップがある」こと以上に、「バックアップが別の安全な場所にある」ことが極めて重要なのです。



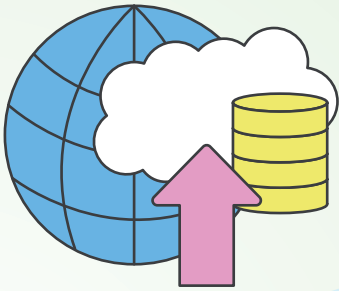
あなたの会社の災害時の対策は大丈夫？

災害に備えるための5つのチェックポイント

- ☐ データのバックアップは社外にも保存されている
- ☐ 停電時でも連絡を受けられる方法がある
- ☐ クラウドサービスを適切に活用している
- ☐ 停電後の復旧手順を社内でも共有している
- ☐ 定期的にバックアップから復元できるか確認している

一つでも当てはまらない項目があれば、この機会に対策を見直すきっかけにしてみてください。

クラウドが選ばれる理由



近年、多くの企業でクラウドサービスの活用が進んでいます。

その大きな理由は、データを会社とは別の場所（データセンター）で安全に管理できることです。

そのため、万が一会社が停電や災害に見舞われても、データそのものが失われるリスクを大きく軽減できます。

また、インターネット環境があれば、自宅や外出先、出張先などから必要なデータへアクセスできるサービスも多く、業務を継続しやすい点も大きなメリットです。

「会社に行かないと仕事ができない」から、「どこからでも仕事を続けられる」へ。これも、クラウドが選ばれている大きな理由の一つです。

災害時に差がつく「電話環境」

停電時に困るものの一つが、会社の電話です。

停電で電話機が使えなくなると、お客様は会社が営業しているのか、休業しているのか分からず、せっかくの問い合わせを逃してしまうこともあります。

しかし最近では、クラウド型電話サービスの普及により、会社の電話番号へかかってきた電話を、スマートフォンや別の拠点で受けられる仕組みが増えています。

そのため、停電や災害が発生した場合でも、お客様との連絡手段を維持しやすくなりました。

録画データを守るという考え方

防犯カメラを設置していても、録画機（レコーダー）が停電すると録画は停止してしまいます。

さらに、レコーダーが盗難や火災、水害などの被害を受けると、肝心の映像を確認できなくなる可能性もあります。

そこで近年注目されているのが、クラウド録画です。映像をクラウドへ保存することで、万が一現地の機器が故障・盗難・災害に遭っても、大切な映像を安全に保管できます。

防犯対策だけでなく、災害時の記録や事業継続の面でも安心感が高まります。

一番大切なのは「壊れないこと」ではなく「早く復旧できること」

災害対策というと、「壊れない設備」を導入することを思い浮かべる方も多いでしょう。もちろん、それも大切です。

しかし、どんな設備でも100%壊れないとは言えません。だからこそ重要なのは、トラブルが発生したときに、どれだけ早く通常業務へ戻れるかという視点です。

例えば、半日で業務を再開できる会社と、3日間業務が止まってしまう会社では、お客様への対応や売上への影響は大きく変わります。そのため近年では、「何を守るか」だけではなく、「どれだけ早く復旧できるか」を重視したIT環境づくりが、企業の災害対策として重要視されています。

【私たちのBCPへの想い】

台風や豪雨などの自然災害は避けられません。しかし、災害が発生しても「仕事を止めない仕組み」を整えることはできます。これからの事業継続対策（BCP）で大切なのは、壊れない設備を目指すことではなく、止まっても早く復旧できる環境を備えることです。私たちの役割は、機器をご提供することではありません。皆さまのオフィスの状況に寄り添い、一日も早い復旧を支える「仕事が止まらない安心」を、一緒につくっていくことです。

世界がAIの「ルールづくり」に本格着手

国連対話とホワイトハウスの新基準



AIの「作る競争」から「治める競争」へ

これまでAI業界は、より賢く高性能なモデルを開発する「性能競争」が話題の中心でした。しかし2026年7月、話の焦点は少し変わりつつあります。世界各国が、急速に進化するAIをどう安全に運用し、社会に組み込んでいくかという「ルールづくり」に本腰を入れ始めたのです。

国連が初めての「AI ガバナンス対話」

7月6日、スイス・ジュネーブで国連加盟193カ国に加え、企業や研究者、市民団体が参加する初の「グローバルAIガバナンス対話」が開幕しました。専門家パネルからは、AIの能力向上のスピードに、安全性の科学的な理解が追いついていないとの懸念の声が上がっています。国境を越えて広がるAI技術を、一国だけでなく国際社会全体でどう見守っていくかが議論のテーマです。

米国も自主基準づくりへ

同じ頃、米国政府も動き出しています。OpenAIやGoogle、Anthropicといった主要AI企業との調整を経て、最先端モデルを一般公開する前に、政府が一定期間チェックする仕組みを含む自主基準の枠組みを近く発表するとみられています。これまで各社が独自の判断で新モデルを公開してきましたが、今後は業界共通のルールに近づいていく可能性があります。

世界で最も厳しい「EU AI法」が本格施行へ

国連や米国が「これからの基準」を話し合う一方で、すでに具体的な「法律」として世界を動かしているのが欧州連合（EU）です。世界初となる包括的なAI規制法（AI Act）が、いよいよ2026年8月から大部分の規制において本格施行されます。

この法律は、AIをリスクの高さに応じて分類し、危険なAIの使用を完全に禁止するものです。例えば、職場で従業員の「感情」を勝手に分析するAIや、人々の行動を監視してランク付けするようなAIは認められません。また、私たちがよく使うAIチャットボットも、「これはAIが対応しています」と明示することが義務付けられます。

世界各国で AI のルールづくりが進む中、日本でも企業向けの AI ガイドライン整備が進んでいます。

- AI へ機密情報を入力しない
- AI が作成した文章は必ず人が確認する
- AI の回答をそのまま公開しない
- AI を利用したことを記録する

「ヨーロッパの法律なら、日本には関係ないのでは？」と思うかもしれません。しかし、ここが今回のルールづくりの最大のポイントです。この法律は、EU 域内に拠点がなくても、EU の顧客向けにサービスを提供している世界中の企業に適用されます。



技術の進化は止まりません。だからこそ、それを支えるルールや仕組みにも、これからますます注目が集まりそうです。

世界がビジネスや安全のためのルールを整える中、エンタメの聖地アメリカ・カリフォルニア州では、一風変わった、しかし切実な法律が作られ話題を呼んでいます。



ボーっとしているなら解いてみて!

暑さで溶けかけたアタマを、ちょっとだけ動かしてみましょう。
直感だけで選ぶと、まんまと引っかかるかもしれません。

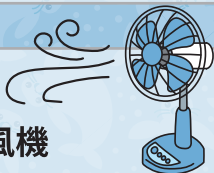
Q1 夏の冷たい一杯



コップに並々と冷たい水が入っています。
そこに、コップからはみ出る大きな氷が一個、プカプカと浮いています。
この氷がすべて溶けたとき、コップの水はどうなるでしょうか?

- A: 水がコップから溢れ出る
- B: 水位はピタッと変わらない(溢れない)
- C: 氷が溶けて体積が減るため、水位は下がる

Q2 無人の部屋と扇風機



真夏の猛暑日、窓もドアも完全に閉め切った、誰もいない部屋があります。
ここで、扇風機を「強」のまま1日中回し続けました。
夕方、部屋に戻ってきたとき、部屋の温度はどうなっているのでしょうか?

- A: 風が空気を冷やすので、温度は下がっている
- B: 風が空気を循環させるだけなので、温度は変わらない
- C: モーターの熱などの影響で、温度は上がっている

Q3 肌トラブルの意外な原因



日焼け止めもしっかり塗って完璧に対策をしたのに、少し外を歩いただけで、なぜか普段の何倍もの速さで肌が真っ赤に焼け、ひどい肌荒れ(火傷のような状態)を起こしてしまいました。
その原因となったものはどれでしょうか?

- A: 痛み止め
- B: 乳酸菌飲料
- C: ビタミンCのサプリメント



解答はこちら

- Q1 B 見た目は今にも溢れそうですが、氷がコップの底につかずに「浮いて」いる限り、溶けても水面は1ミリも変わりません。水は水になるときに全体のボリュームが約10%縮みます。そして、氷が水に浮くとき、水面の上に突き出るのも全体の約10%です。この「縮む分」と「はみ出している分」が完全に相殺されてピタッと元のスペースに収まるため、どれだけ上にはみ出しても溢れないのです。物理の法則(アルキメデスの原理)って不思議ですね!
- Q2 C 扇風機は「空気を冷やす機械」ではなく、「風を送って人間の皮膚の汗を蒸発させ、体感温度を下げる機械」です。締め切った部屋で回し続けると、扇風機のモーターが放つ熱や、羽根が空気をかき混ぜる摩擦熱によって、部屋の温度はむしろ少し上がってしまいます。
- Q3 A 一部の「痛み止め(ロキソプロフェン等)」や「ニキビ治療薬」「血圧の薬」には、体内で紫外線と反応して急激な皮膚炎を起こす副作用(光線過敏症)を持つものがあります。また、湿布を貼った場所を日光に当てるのも同様に危険です。薬を使っている時は、いつも以上に徹底的な日焼け対策を心がけましょう!